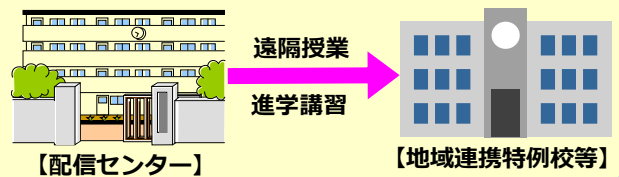


# 北海道高等学校遠隔授業配信センター (愛称：T-base) を知っていますか？

北海道教育庁学校教育局高校教育課（令和4年（2022年）3月）

北海道教育委員会では、道立高等学校の小規模校化や、広域分散型という本道の地域特性を踏まえ、令和3年（2021年）4月、北海道有朋高等学校内に「北海道高等学校遠隔授業配信センター」（愛称：T-base）を開設し、小規模校の魅力化を図っています。



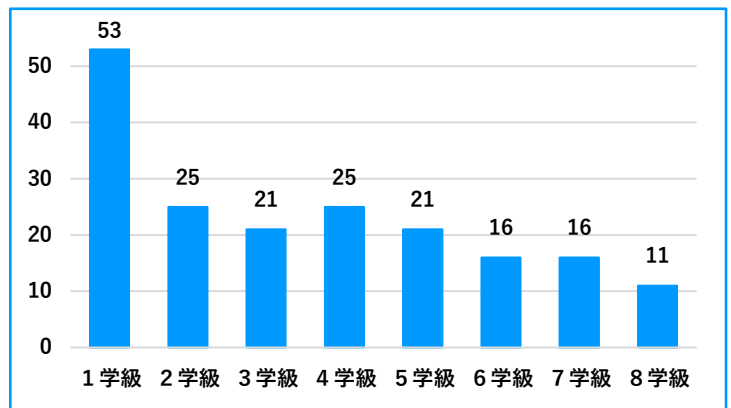
## 1 開設の背景

中学校卒業生数の減少等により、道立高等学校の小規模校化が進んでいます。令和3年度（2021年度）においては、第1学年が1～3学級の道立高校は99校（52.7%）と半数以上を占めており、第1学年1学級の高校は53校と最も多くなっています。

小規模校のメリットとしては、生徒一人一人に対するきめ細かな指導の充実や地域の教育資源や人材を活用した教育活動の充実がある一方、次のような課題があります。

【小規模校における課題】

- ・ 教員配置数の減少
- ・ 設置科目数の減少
- ・ 切磋琢磨する機会の減少
- ・ 部活動の停滞の懸念



【令和3年度 道立高等学校（全日制）第1学年の学級数別学校数】

## 2 北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base）のコンセプト等

小規模校化の課題として、生徒の興味・関心や進路希望に対応した選択幅の広い教育課程の編成の困難さや、切磋琢磨する機会の減少などがあります。

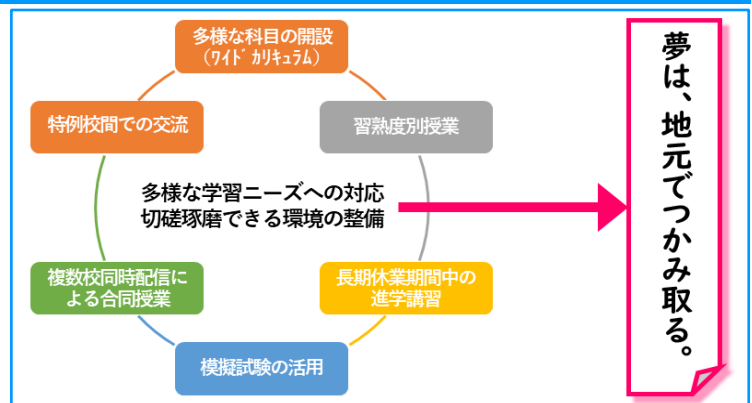
これらの課題に対応するため、令和3年（2021年）4月、北海道高等学校遠隔授業配信センターを開設しました。「夢は、地元でつかみ取る。」というキャッチフレーズのもと、遠隔授業の配信はもとより、進学講習などにも取り組むことで、小規模校の魅力化を図っています。

### 開設目的

どの地域においても、自らの可能性を最大限に伸ばしていくことのできる多様で質の高い高校教育を提供し、地域の小規模な高校の教育課程や教育活動の充実を図ること

### 実施体制（令和3年度）

- センター長（有朋高校の校長が兼務）
- センター専任の教員16名
  - ・ 次長（教頭）1名
  - ・ 教諭15名（国語、地理歴史、公民、数学、情報、理科、音楽、書道、英語）



【北海道高等学校遠隔授業配信センターのコンセプト図】

### 配信対象校（令和3年度）

27校（地域連携特例校25校と離島の道立高校2校）  
※令和4年度は特例校が2校増加し29校に配信予定

### 主な取組

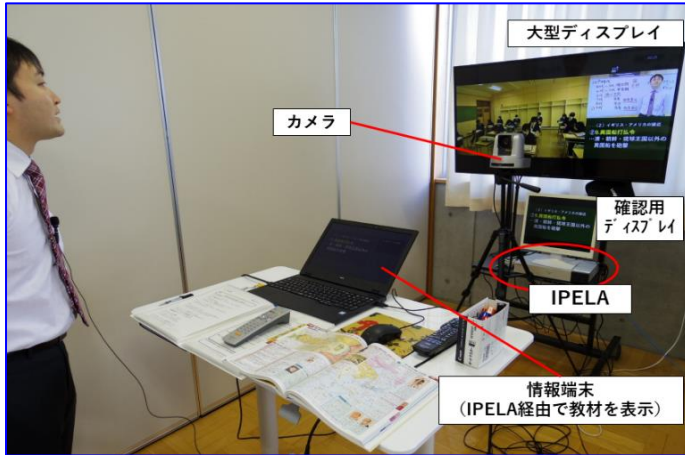
- ・ 配信センターからの遠隔授業の実施（習熟度別授業、多様な科目開設、遠隔合同授業）
- ・ 配信センターからの進学講習の実施
- ・ 遠隔システムを活用した特例校等間における交流等（特例校等間の遠隔授業、生徒会交流、教員研修）

Tele Teaching（遠隔授業を）  
Tied Triangle（配信センター、受信校、道教委の三者がしっかりと結び付いて）  
Tonden base（屯田から配信する拠点）

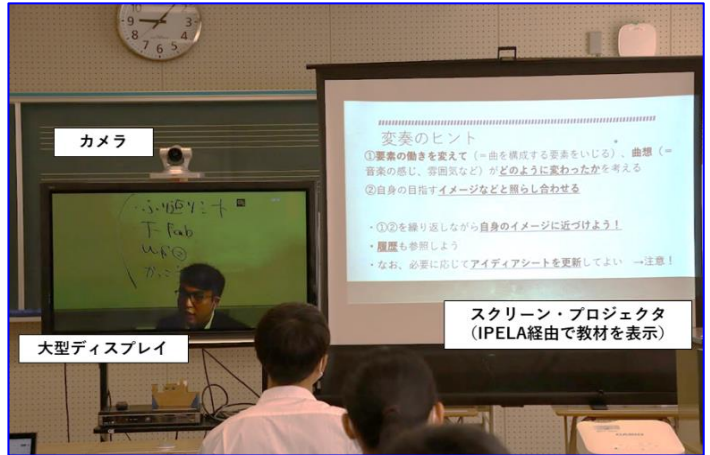
T-base

### 3 遠隔授業の実際

T-baseでは、遠隔授業の配信に当たって、ビデオ会議システム（SONY製のIPELA）を基本としつつ、受信校側の端末の準備状況や生徒の実情、教科の特性等を踏まえ、適宜Web会議システム（Google Meet等）などのクラウドサービスも活用しながら、効果的な遠隔授業の配信に取り組んでいます。



【 配信側（使用機器等の紹介含む）の様子 】

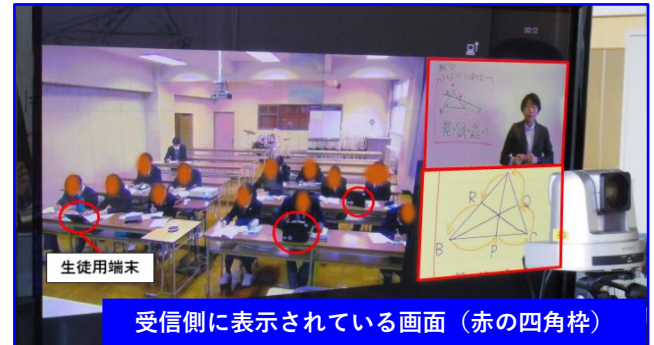


【 受信側（使用機器等の紹介含む）の様子 】

#### 配信方法例① 数学 A

配信方法例①は、ビデオ会議システム（IPELA）を活用した遠隔授業です。ここに掲載している画像は、ホワイトボードを使用して問題の解法を説明している様子です。

授業者（配信者）はワイヤレスマイクやイヤホンを使用して音声面での利便性を確保するとともに、ビデオ会議システム（IPELA）のほかに、Google Classroomを併用して、課題を提示したり、課題提出を行わせたりという工夫も行っています。



配信側（使用機器等の紹介含む）の様子

#### 配信方法例② 英語会話

配信方法例②は、配信方法例①で使用しているビデオ会議システム（IPELA）ではなく、Web会議システム（Google Meet）を活用した遠隔授業です。

映像スイッチャーを使用して、生徒に提示するコンテンツを適宜切り替えるなどの工夫を行っています。



配信側（使用機器等の紹介含む）の様子

### 配信方法例③ 書道 I

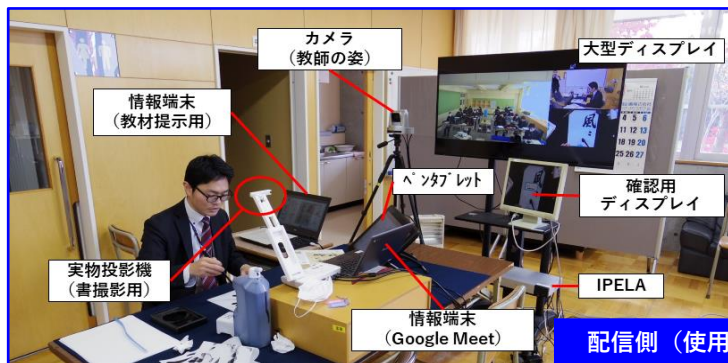
配信方法例③は、ビデオ会議システム (IPELA) と Web会議システム (Google Meet) を併用した遠隔授業です。

各生徒の手元には情報端末があり、Google Meet でつながっています。Google スライドの内容が共有されるとともに、生徒の手元を確認できるようになっています。

また、書く姿勢が大切なことから、実物投影机で上から見た様子を配信するとともに、横から見た教員の様子を受信校に配信しています。



受信側に表示されている画面 (赤の四角枠)



配信側 (使用機器等の紹介含む) の様子

## 4 紙面座談会「T-baseってどんなところ？」

T-baseで実際に遠隔授業を担当している先生に、T-baseのことについて聞いてみました。

### 井口先生

国語担当。T-baseは5校目の勤務校。ICT関係は苦手だったものの、T-baseでの勤務を通じてICTスキルが向上中。

### 杉浦先生

理科担当。T-baseは2校目の勤務校。新しいことに挑戦することが好き。ICTを活用した効果的な授業づくりを日々模索中。

### T-baseでの勤務を希望した理由を教えてください。

#### 井口先生

地方の高校では、夢を叶えられないといって地元を離れる中学生が多くいることを過去の勤務経験から知っており、課題意識を持ち続けていました。遠隔授業を配信することで地方の子たちが学びたいことを学べ、進路を実現するチャンスを与えられるという事業を知り、役に立ちたいと思い希望しました。

#### 杉浦先生

理由は2つです。1つは新しい組織の立ち上げに関わってみたいということ。全国的にも珍しい事業なので、どんな仕事ができるのかワクワク感を持って希望しました。もう1つは自分の授業について見つめ直せるだろうということ。遠隔授業に向けて、今までの授業を一から作り直す必要がある。そうした環境に身を置いてみたいという気持ちがありました。

### T-baseに勤務してイメージの変化はありましたか。

#### 井口先生

配信など技術的なことは専門の方が担当すると思っていましたが、機器の接続や調整など自分でやらなければならないことがたくさんありました。もちろんT-baseの先生方が積極的にサポートしてくれます。

#### 杉浦先生

勤務する前の「遠隔授業」は、予備校の衛星授業やYouTubeなどのオンデマンド型のイメージがありましたが、遠隔会議システムを使った双方向型であったり、生徒の1人1台端末の状況を踏まえてGoogle Meetを使った授業をしたりと、想像と大きく違いました。

